

万歳用語	<p>新春に家々を訪れ、</p> <p>ツルは千年のお祝いと カメは万年のお祝いと</p> <p>などと、祝って歌い舞ったりすることや、 それを演ずる人をまんざいといい、萬（万）歳と書く。</p>
太夫（たゆう） と 才蔵（さいぞう）	<p>尾張万歳は、扇子を持った太夫と鼓を持った才蔵と二人一組で、才蔵の鼓にあわせて太夫が祝言を述べて舞ったり、言葉の掛け合いをしたりするのが基本となっている。芸に秀でた年長者が太夫を努めます。</p>
檀那場（だんなば） と 門付（かどづけ）	<p>もともと万歳は、家々の門や玄関先あたりで舞う「門付け」が普通であったため門付万歳と呼ばれています。</p> <p>知多地方は、海と丘陵地にはさまれて、農耕に適した土地に恵まれなかつたため、農民の暮らしは裕福ではありませんでした。そのため尾張万歳は、貧しい農民たちの数少ない娯楽のひとつとして、また農閑期の貴重な収入源となる出稼ぎとして引き継がれてきました。</p> <p>その後、江戸時代になると、芸の優れた者の中には、江戸の大名屋敷や武家屋敷へ万歳に行くようになり、新たな訪問先を開拓していきました。</p> <p>このような座敷に上がって演じる万歳は、檀那場万歳として、つまり得意先を中心に回る万歳として定着しました。一方、大半の万歳師たちは、方々の家々を訪問し、玄関の土間などで演じて回る門付万歳の形で行っていました。</p>
尾張万歳 文化庁 （文化財選集より）	<p>祝福芸として古くから法華経万歳と御万歳の演目で諸国を回国していたが、江戸期に娯楽的な演目を加え、明治期に完成した。はなやかな動きと豊富な演目は、後の寄席芸能の万才にも影響を与えたといわれ、芸能史上重要なものである。</p>
萬歳の起源 「尾州本賀崎 灵鷲山長母禪寺 開山無住国師略縁起」 より	<p>「有助といえる者二子あり 兄を有政といい 弟を徳若と名付く</p> <p>父子ともに 庭の掃除などして世を渡りけり</p> <p>弟徳若に 法華経の文字にて 正月の寿を授けられたり</p> <p>これを萬歳樂という これ 萬歳の始なり</p>